

エレミヤ書7章2-4節 「『主の宮』という偽り」

1A 建物に頼る偽り

1B イエスの宮清め

2B 心の動機

2A 不正や偶像礼拝

1B キリスト者として

2B 汚れからの分離

本文

エレミヤ書7章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、先週で5章まで来ましたが、今日の午後礼拝で6章から8章まで読みます。今朝は7章2-4節に注目してお話したいと思います。「2「主の家の門に立ち、そこでこのことばを叫んで言え。主を礼拝するために、この門にはいるすべてのユダの人々よ。主のことばを聞け。3 イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。あなたがたの行ないと、わざとを改めよ。そうすれば、わたしは、あなたがたをこの所に住ませよう。4 あなたがたは、『これは主の宮、主の宮、主の宮だ。』と言っている偽りのことばを信頼してはならない。」

今、預言者エレミヤは、エルサレムにある神殿の所にまで行って、そこで礼拝のために門を通る人々に預言をせよと命じられています。以前、アーサー・ホランドという伝道師が、新宿駅前のアルタの前で、赤信号で横断歩道の前で待っている人々に少し高いところから福音を語りかけていましたが、ちょうどそんな感じで門を通る人々に神の言葉を語っていました。主の宮ですから、そこに主が住んでおられる、すなわち礼拝するところであったのですが、「これは主の宮、主の宮、主の宮だ。」という偽りの言葉を信頼するな、と説いています。なぜかというと、彼らは主の宮に来ていること自体に安心感を持っていました。バビロンがかなり力を持っていて、ユダの国もバビロンに従わないといけぬ圧力をかけられていた時に、それでも主の宮があるから、主が守ってくださるという声に聞き従うことのないように、と説いたのです。もし、自分の行ないと業を悔い改めることがなければ、あなたがたは追い出されることになるかと警告しました。事実、間もなくしてバビロンがこの神殿を徹底的に破壊し、エルサレムの住民は殺され、残りは捕え移されるのです。

1A 建物に頼る偽り

1B イエスの宮清め

同じことが、イエス様の時代にも起こりましたね。イエス様が地上におられた時は、エルサレムにヘロデ大王の建てた荘厳な神殿がありました。世界の七不思議には入っていませんが、入ってもおかしくない、大理石によって造られたものでした。今でもその遺跡の一部は残っており、今のCGの技術で、立体映像でかなりの詳細を眺めることができます。それはそれは、すごいものです。第

子たちも、オリーブ山から神殿を眺めて、「これはまあ、何とみごとな石でしょう。何とすばらしい建物でしょう。(マルコ 13:1)」と感嘆の声を挙げました。しかし、イエス様は、「この大きな建物を見ているのですか。石がくずされずに、積まれたままで残ることは決してありません。(マルコ 13:2)」と言われたのです。ユダヤ人の指導者たちは悔い改めず、それでローマに紀元 70 年に、神殿が破壊され、ユダヤ人は世界に散らされたのです。

そのヘロデの建てた神殿に戻りますと、礼拝者に対して演出効果もあります。南にあるシロアムの池から都上りの坂を上り、南壁にまで来ます。そこで服を完全に着替えて、ミクバ、すなわち浸礼漕に入ります。そして上がってくることによって、自分は新しく生まれたのだとみなします。そして、傷のないいけにえの羊や牛を携えます。階段を上がるのですが、ちょうどトンネルの中を通るようになっていて、そこから出てくると正面に、神殿の側面が大きく見える外庭に出てきます。この、暗いところから太陽光の反射でまばゆく輝く大理石の建物によって、神の栄光の輝きを受けているかのような錯覚を受けるのです。ですから、この神殿がまさか破壊されるとは思わなかったでしょうし、祭司たちは事実、ローマが自分たちを追い出すなど考えつきもしなかったそうです。

しかし、そのようなすばらしい神殿の建物といけにえの制度の中には、巧妙な集金システムが組み込まれていました。ローマの貨幣はカイザルの銘があるので汚れているとし、神殿の貨幣シエケルに変えないと献金ができないということで、両替商が発達していました。そこには、両替手数料があり、それで祭司たちは収益を得ていました。そして、携えてくる牛や羊についても、その体に傷や欠陥があればそれは神に捧げることができないという律法がありますから、見つけた場合は、祭司認定の家畜を購入しなさいということで、これもまた高価なものでした。こうやって、神殿に来るユダヤ人は絶えることはないですから、いつまでもお金が生み出される体制があって、祭司たちは裕福になっていたのです。そこでイエス様が最後の週にエルサレムに入られて、宮清めを行なわれたのです。両替の台を倒すなどして、そして彼らに言われました。「マタイ 21:13『わたしの家は祈りの家と呼ばれる。』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている。』」祈りの家という言葉は、イザヤ書に出てくる言葉です。そして、強盗の巣というのは、エレミヤがここ 7 章で 11 節に語っている言葉です。

神殿の管理はユダヤ教の中でもサドカイ派が行なっていましたが、パリサイ派もまたこの神殿に入ってきた時は、自分はきちんと主に捧げているという自負を持っていました。パリサイ派と、取税人の祈りの対比の喩えのことを思い出してください。「神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。(ルカ 18:11-12)」このように、自分のしていることを確認して、他の人たちよりは自分はやっていると人と比べて、満足している状態でした。このような形で、人々は神殿礼拝によって自分たちは守られている、救われていると思っていたのです。

2B 心の動機

さて、今日、神殿と呼ばれている所はどこでしょうか？そうです、私たちキリストを信じる者たちの集まる教会が、御霊が住まわれる神の宮と呼ばれています。「1コリント3:16 あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。」

私たちは、教会に来ているその動機はどうなっているのでしょうか？日曜に、主が甦られたこの日に共に集まることはとても良いことです。いや、しなければならぬことです。どんなことがあっても、この日は主を礼拝するために開けるというのは、ちょうどどんなに忙しくても歯は磨くのと同じように、選択ではなく、キリスト者としてはしていくものです。習慣とすべきものです。けれども、それがいつの間にか「惰性」となっていることはないでしょうか？「日曜日は行くもの」ということで、教会には来ているものの、ただ足を運んでいる、なぜ来ているのか、主を心から喜んでいるのか、分からなくなっているということはないでしょうか？

あるいは、「義務」で来ているということもあるでしょう。奉仕を頼まれているから、教会を休むことはできないとして来ていることがあるかもしれません。担当が回ってくる時は、それをこなしていなければいけません、なければ礼拝に来ている意味があまり感じられないのであれば、それは義務感で来ていることになります。あるいは、他の教会の人たちに見られているから、牧師に見られているから、休む訳にはいかないと思う時もあるかもしれません。または、日曜日に教会に来ればとりあえず、自分はクリスチャンとしての面子や自信が持てるということもあるかもしれません。これらはみな、「ただ来ている」という事実だけで自分を安心させている動機です。それは、神の宮そのものに信頼を置いてしまっているユダヤ人と同じになっています。

そこで、私たちが集まる動機をヘブル書の著者が教えてくれています。「ヘブル 10:21-25 また、私たちに、神の家をつかさどる、この偉大な祭司があります。そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」一緒に集まることをやめたりしなさいで、ますますそうしようではありませんか、と言っています。けれども、やみくもにそれを言っているのではなく、しっかりとした根拠があります。

一つは、私たちのために血を流してくださった方が、私たちの教会の大祭司としておられるということです。私たちは、このことを受け入れているのでしょうか？何もしなくても、それでも一切の罪をご自身の血で清めてくださった方がおられるのです！この喜びがありますか？すると、私たちは神に近づきたいと願うようになります。これが、私たちが礼拝に集う最も大きな動機です。そしてもう一つは、「希望を告白する」ということです。その希望とはキリストご自身であり、キリストが戻っ

て来られることです。私たちは、この方のみが堅い礎であり、他は揺らいでしまうものであることを知っています。だから、集います。そして、三つ目に励まし合うことです。キリストが戻って来られるまで、その信仰の競走を終えるまで、しっかりと愛の実践をすることができるように励まし合います。ですから、あなたの罪がキリストの血で清められたこと。神に近づくこと。キリストとその到来にこそ希望があること。そして互いに励まし合うことです。これが、集まる理由であります。

2A 不正や偶像礼拝

そして、エレミヤはエルサレムの神殿に来る人々に、神からの戒めを与えています。「9 しかも、あなたがたは盗み、殺し、姦通し、偽って誓い、バアルのためにいけにえを焼き、あなたがたの知らなかったほかの神々に従っている。10 それなのに、あなたがたは、わたしの名がつけられているこの家のわたしの前にやって来て立ち、『私たちは救われている。』と言う。それは、このようなすべての忌みきらうべきことをするためか。」彼らは、礼拝に来ているのですが、その生活の中でこれらの罪を犯していました。盗み、殺し、姦通し、嘘をつき、そして偶像礼拝をしていました。これらのことをしていたら、礼拝をしていると言っても、取り除かれてしまうことを警告しています。

1B キリスト者として

そこで私たちは、同じことを問わないといけません。教会に集っているということが、私たちの救いになっているのではないことを今、お話ししました。では、何をもって自分がキリスト者であることを証明するのでしょうか？まず、コリント人への手紙第一 6:9-11 を読みます。「あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。あなたがたの中のあの人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」

もし教会に定期的に来ていて、私はクリスチャンだと言っても、結婚以外の関係で性的な関わりを持っているのであれば、その人は自分をクリスチャンだということは難しくなります。このような汚れから洗われて、聖なる者とされて、義と認められたのがクリスチャンです。何か自分が貪っているものはあるでしょうか？その他、偶像礼拝をしていながら、貪っているながら、酒に酔いしれることは数知れず、それで教会に来ている自分はキリスト者だと言ったら、自分を欺いているのです。

同じような内容が、ガラテヤ書 5章 19-21 節にもあります。「肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」ここでは肉の欲だけでなく、知的な高慢も書いてあります。自分が正しいと思って、相手に敵意を抱いていること、争いの心、そねみ、憤り、分裂や妬み、これらを持ちながらなおのこと、

平気で教会に来られているということは、自分自身が信仰の中に立っているのかどうか、確かめないとはいけません。

そして、ヨハネの手紙第一 3 章 9-12 節も読んでみます。「だれでも神から生まれた者は、罪のうちを歩みません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちを歩むことができないのです。そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行なわない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。互いに愛し合うべきであるということは、あなたがたが初めから聞いている教えです。カインのようであってははいけません。彼は悪い者から出た者で、兄弟を殺しました。なぜ兄弟を殺したのでしょうか。自分の行ないは悪く、兄弟の行ないは正しかったからです。」私たちが、兄弟や姉妹を恨んでいたりと、憎んでいたらどうでしょうか？神から出た者ではない、とはっきりと言っています。平気で罪を犯して、そのままに放置している人。兄弟に対して憎しみを抱いて、そのままにしている人。その人は、もはや神の愛に留まっています。どこかで外れてしまっています。自分自身がキリスト者であるという保障がありません。

2B 汚れからの分離

したがって、私たちは聖なる神の霊が住まれる宮なのです。悔い改めが必要です。汚れから離れることが必要です。そうすることによって、主が親しく私たちの間に住んでくださいます。「2コリント 6:14-18 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。キリストとペリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」